

CITYMAKERS AWARD 2026



PEOPLE, STORIES, AND THE CITY

渋谷新聞・原宿表参道新聞は、

人の歩みを、街の歩みへつなぐ ローカルメディアです。

渋谷新聞 SHIBUYA SHIMBUN | 原宿表参道新聞 HARAJUKU OMOTESANDO SHIMBUN

街の魅力や文化は、そこに関わる一人ひとりの歩みから生まれています。
挑戦する人、文化を生み出す人、人と人とのつながりを育む人。
そうした一人ひとりの想いや活動が、今の渋谷を形づくっています。

だからこそ私たちは、この街にいる一人ひとりの歩みに目を向け、
その背景や想いまで記録し伝えていきます。
誰かの歩みを知ることが共感や憧れを生み、
新たなつながりや行動のきっかけになっていく。

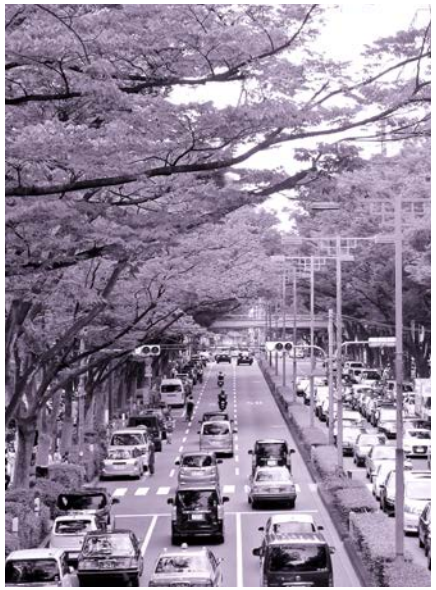
さらに、これまでの歩みに光を当て広く届ける「CITYMAKERS AWARD」や、
アワードをきっかけに生まれる新たなつながりを通じて、
その活動をより多くの人へ広げていきます。

一人の歩みが誰かの共感を生み、
その共感が新たな街の歩みになっていく。

それが、渋谷新聞と原宿表参道新聞が目指す、
メディアのかたちです。

A CITY OF POSSIBILITIES FOR EVERYONE

誰もが挑戦できる街へ。



街の魅力は、建物や場所だけで生まれるものではありません。そこに暮らす人、働く人、学ぶ人、訪れる人。さまざまな人々の営みが重なり合い、その街ならではの文化や個性が育まれていきます。

渋谷新聞・原宿表参道新聞は、これまで街で活動する人々の声を拾い、その想いや挑戦を伝えてきました。新たな担い手を迎え、異なる視点を取り入れながら、街とともに歩みを重ねてきたことも、私たちの大切な財産です。

渋谷新聞の創刊5周年を機に、渋谷新聞・原宿表参道新聞は新たな一歩を踏み出します。これまで培ってきた「人に向き合う姿勢」を受け継ぎながら、一人ひとりの存在や活動を、よりメディアの中心に据えていきます。

私たちが目指すのは、年齢や肩書き、所属、経験にとらわれず、誰もが自分の想いやアイデアを持ち寄り、新しいことに挑戦できる街です。

日々の暮らしの中にある小さな発見や、街への想いから始まる活動にも目を向け、その背景にある物語を丁寧に紡いでいきます。

街に生きる人々とともに歩み、挑戦する人に寄り添い続けること。それが、私たちの変わらない原点であり、これからも大切にしていく姿勢です。





A CITY SHAPED BY CONNECTIONS

人と人のつながりを、街を動かす力に。

一つの記事が、新しい出会いのきっかけになる。誰かの活動を知ることで、次のアイデアが生まれる。私たちは、そんな日常の小さなきっかけを、街を動かす大きな力へと育てていきたいと考えています。

これからの渋谷新聞・原宿表参道新聞は、取材や発信を通じて人々の活動を伝えるとともに、対話や交流の場をつくり、街に新たな関係性を育むコミュニティメディアへと進化していきます。

紙面やWeb、SNSを通じて多様な人々の活動を届け、イベントや地域での取り組みを通じて、実際に人と人が出会う機会を生み出していきます。

企業、行政、商店街、クリエイター、地域住民など、さまざまな立場の人々が、それぞれの知識や経験を持ち寄ることで、新しい企画や協働が生まれていく。

そうしたつながりが継続し、次の活動へと広がっていく関係性を育むことも、私たちが担っていきたい役割です。

人が街をつくり、街が人を育てる。一人ひとりの想いや行動が街の新たな価値につながる、そんな循環を生み出すローカルメディアを目指します。

CELEBRATING THE PEOPLE WHO SHAPE OUR CITY

街の未来をつくる、
一人ひとりの歩みに光を。

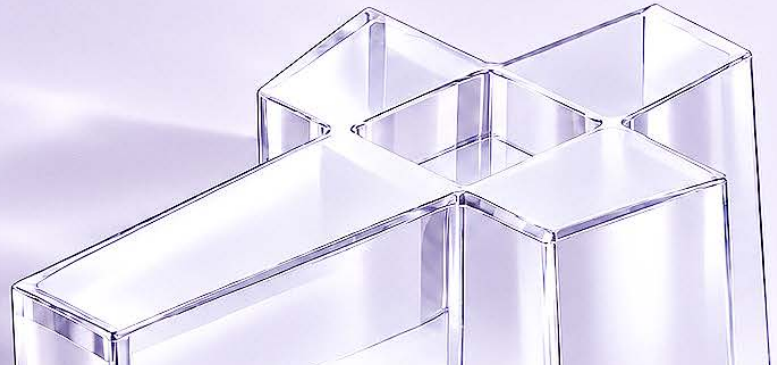
「CITYMAKERS AWARD」は、渋谷新聞の創刊5周年を機に、
2026年に創設されたアワードです。
第1回のテーマは「New Era」。

渋谷・原宿表参道を舞台に、街の文化やコミュニティを育み、
新しい価値を生み出してきた人々の功績と挑戦を称えます。
本アワードが目指すのは、これまでの歩みに光を当てるとともに、
その想いや活動を次の世代へつないでいくこと。

一人の挑戦が誰かの新たな一歩となり、
人と人との出会いから新しい共創が生まれていく。

街をつくる人々の歩みを、街の未来へ。
CITYMAKERS AWARDは、ここから始まります。

CITYMAKERS
AWARD
2026



6 CATEGORIES & CRITERIA

THE LOCAL TITANS

01 | 街の顔部門

長年にわたり街に根を張り、人々の信頼を集めながら、渋谷・原宿表参道の発展を支えてきた人物を称えます。活動の継続年数、商店街や行政など多様な主体との協働実績、街に呼び込んだ人や文化の広がりを評価します。

THE CULTURAL ICONS

02 | カルチャーアイコン部門

音楽、アート、ファッションなどの表現活動を通じて、街に新たな文化や価値観を生み出してきた人物を称えます。作品や活動の発信実績、街やSNSへの波及力、共感を起点に生まれたコミュニティの広がりを評価します。

THE CHIEF CONNECTORS

03 | コネクター部門

立場や業界、世代を越えて人と人をつなぎ、新たな協働や挑戦を生み出してきた人物を称えます。異なる分野を結びつけたプロジェクトの実績、交流の場づくり、地域団体との連携を通じて育まれた関係性を評価します。

THE NEXT-GEN ACCELERATORS

04 | アクセラレーター部門

次世代の才能を見いだし、挑戦の機会をつくりながら、若手の成長を後押ししてきた人物を称えます。若手が活躍する舞台の創出、育成の仕 組みづくり、独立や起業など新たな一歩を踏み出した人材の輩出実績を評価します。

THE FINANCIAL ALTRUISTS

05 | ビジネスエコシステム部門

事業活動を通じて地域に新たな機会を生み出し、街の経済とコミュニティを育んできた人物を称えます。地元企業やクリエイターとの取引・連携、店舗や空間の開放、異業種との協働など、地域に広がる経済的・社会的な循環を評価します。

THE FUTURE ARCHITECTS (U23)

06 | 若手/ルーキー部門(U23)

23歳未満の若き挑戦者の中から、独自の発想と行動力で街に新たな動きを生み出す人物を称えます。自ら企画・実行した活動の実績、仲間を巻き込む力、構想を形にするまでの過程に加え、発想の独自性や未来への可能性を評価します。

CITYMAKERS AWARD

GRAND PRIZE | 大賞

6部門の評価軸を横断し、街への愛着と信頼、多様な人々を巻き込む力、継続的な実践によって、渋谷・原宿表参道の未来を切り拓いてきた人物に贈る最高賞です。

Kentaro Kasho

加生健太朗

一般社団法人つなげる30人代表理事。
2016年から「渋谷をつなげる30人」を展開し、10年間で約300人の参加者を
街へ送り出してきた。企業、行政、NPOなどの垣根を越え、
人と人がつながり続ける共創の仕組みを育んでいる。

街の同級生をつくり、挑戦が続く渋谷へ。

「街の同級生をつくる」。加生健太朗さんは、この言葉を大切に、10年間にわたり渋谷で人と人をつなぎ続けてきました。2016年に始まった「渋谷をつなげる30人」では、企業、行政、NPOなど異なる立場の人々が肩書きを越えて出会い、街の課題や可能性を語り合います。これまでに約300人が参加し、落書き消しや地域の居場所づくりなど、多様な共創プロジェクトが生まれました。

目指すのは、プログラムが終わっても続く関係性。困ったときに相談できる人、一緒に挑戦できる仲間が街のあちこちにいることです。特定の誰かに頼るのではなく、誰もが人をつなぐ存在になれる。加生さんが育ててきたのは、渋谷の未来を支える人と人とのつながりそのものです。



多様な立場の人々が集う「渋谷をつなげる30人」の会場風景


参加者との対話を重ねる加生氏



Lorenzo Menghi

ロレンツォ・メンギ

クリエイティブディレクター、アーティスト。
神宮前二丁目の街路灯42基を活用したアートプロジェクトを展開。
商店街や地域住民との協働により、街の日常空間を
24時間楽しめるギャラリーへと変え、アートと街をつないでいる。

街路灯から、街全体をアートの舞台に。

街を歩く何気ない時間に、アートとの出会いが生まれる。ロレンツォ・メンギさんは、神宮前二丁目の街路灯42基を活用し、日常の風景をギャラリーへと変える取り組み「Jinny Street Gallery Project」を展開しています。街にすでにあるインフラに新たな価値を見いだし、年間約26本の展示を企画。24時間、誰もが自由に作品に触れられる環境をつくってきました。

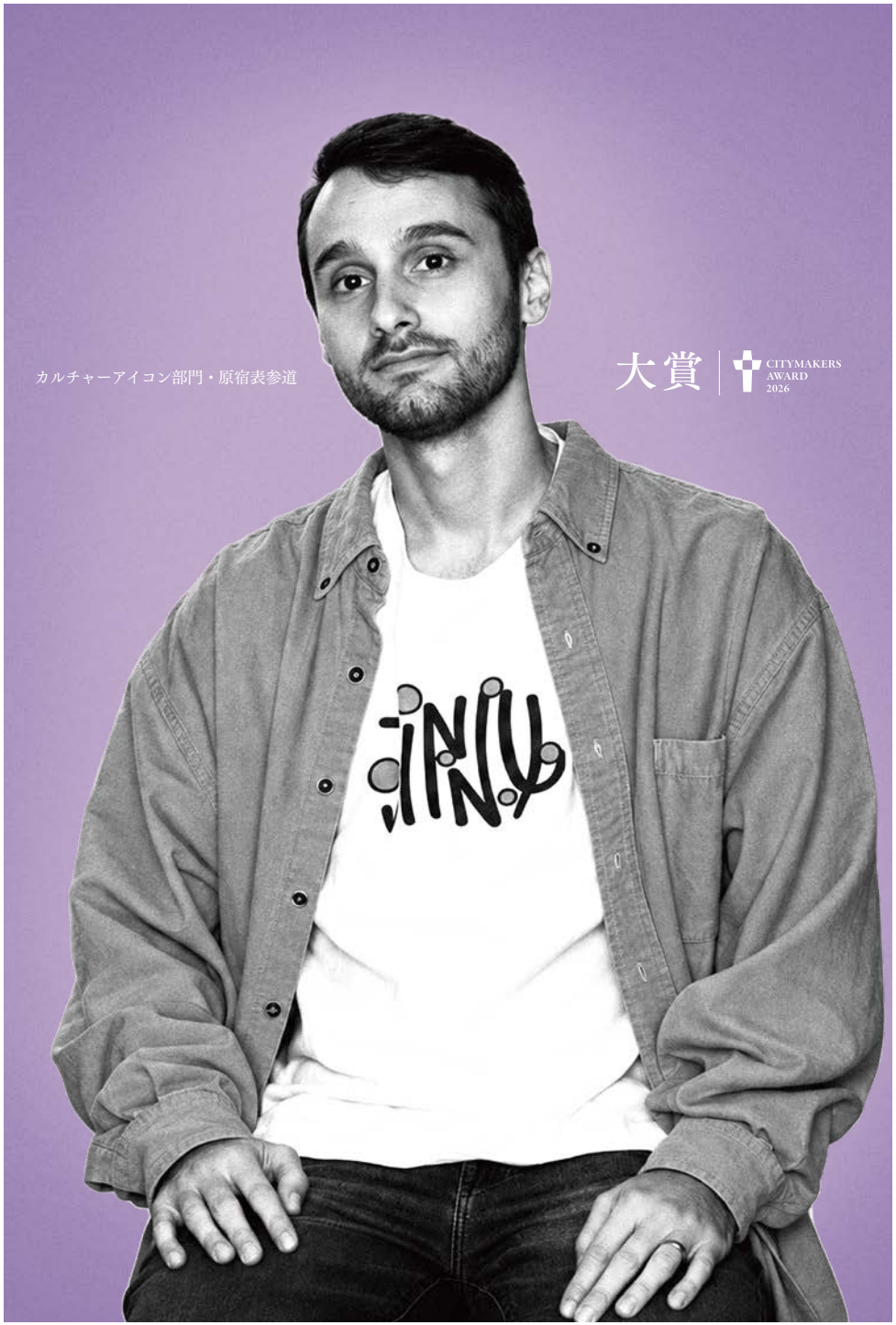
その実現を支えたのは、商店街や地域住民との丁寧な対話です。地域の人々と信頼関係を築きながら、アートを一過性のイベントではなく、街の日常に根付く文化へと育てています。神宮前二丁目を自らの「わが家」と呼ぶロレンツォさん。街への愛着と自由な発想から生まれた挑戦は、都市の公共空間に新しい可能性を示しています。



神宮前二丁目を舞台に展開されている「Jinny Street Gallery Project」



夜の街路灯に浮かび上がる展示作品





Kenji Onishi

大西賢治

渋谷道玄坂商店街振興組合理事長、渋谷区商店会連合会会長。30年以上にわたり地域活動に携わり、59商店会を束ねる。盆踊りや地域イベント、清掃・防犯活動などを通じ、渋谷の賑わいと街のつながりを支えてきた。

伝統と挑戦をつなぎ、渋谷の賑わいを育む。

「毎日がフェスのような街」。そんな渋谷の魅力を、街の現場から支えてきたのが大西賢治さんです。渋谷道玄坂商店街振興組合理事長、渋谷区商店会連合会会長として、59商店会をはじめ、行政、企業、地域の人々をつなぐ役割を担ってきました。SHIBUYA109前などの公共空間を活用した盆踊りや地域イベント、清掃・防犯活動など、その取り組みは多岐にわたります。再開発が進む中でも、路地裏の店舗や地域で暮らす人々の声に耳を傾け、街の伝統と新しい文化が共存できる環境を築いてきました。目指すのは、訪れる人も働く人も楽しめる渋谷。人々の想いを束ね、街の賑わいを次世代へつなぐ、大西さんの歩みが渋谷の今を支えています。



渋谷109前に多くの人が集い、賑わいを生む「渋谷盆踊り」



Tamotsu Yagihara

八木原保

原宿神宮前商店会名誉会長、株式会社ジム創業者。1965年から約60年にわたり原宿で事業と街づくりに携わる。商店会や行政、商業施設をつなぎ、若い才能が挑戦できる街の土壌を育ててきた。

原宿の可能性を信じ、次の才能に舞台を。

まだ静かな住宅地だった原宿に、街の未来を見いだした25歳の青年。それから約60年、八木原保さんは原宿の変化を見つめながら、街の発展を支えてきました。ラフォーレ原宿をはじめとする商業・文化の集積を支え、商店会や行政、企業との信頼関係を築いてきたその歩みは、原宿という街の歴史そのものです。大切にしてきたのは、自らが主役になることではなく、次の世代に舞台を用意すること。まだ何者でもない若者の可能性を信じ、新しい挑戦を受け入れ続けてきました。人と人が顔を合わせ、互いを信頼する関係こそが街の力になる。八木原さんが育んできた原宿の文化と精神は、今日も新たな挑戦者へと受け継がれています。


ベスト・ファーザー賞の授賞式での八木原氏



1965年に原宿でニット専業メーカー「ジム」を創業



Sosuke Sugiura

杉浦草介

Commons Archive Collective代表、グラフィックデザイナー。渋谷の歴史的な写真や資料を収集・公開する「渋谷アーカイブ写真展」などを企画。研究者、商店街、行政、クリエイターをつなぎ、街の記憶を共有財産として未来へ継承する。

街の記憶をひらき、未来をつくる人をつなぐ。

変わり続ける渋谷の街で、かつてそこにあった風景や人々の営みを、未来へどう手渡していくのか。杉浦草介さんは、デザインの力を通じて街の記憶を共有する活動に取り組んでいます。「Commons Archive Collective」を立ち上げ、研究者や商店街、行政、若手クリエイターとともに「渋谷アーカイブ写真展」などを開催。展示された昔の渋谷の写真を前に、懐かしさから涙する来場者の姿もありました。大切にしているのは、記録を保存するだけでなく、人々が記憶を持ち寄り、語り合える場を育てること。専門や世代の異なる人々をつなぎ、街の歴史を誰もが触れられる共有財産へと変えていく。その活動は、渋谷の過去と現在、そして未来を結ぶ新しいデザインの実践です。



「渋谷アーカイブ写真展2026」のキービジュアル



街の記憶に触れる来場者。「渋谷アーカイブ写真展2024」より



Jungo Kanayama

金山淳吾

一般財団法人渋谷区観光協会 前代表理事、合同会社 TNZQ 代表社員。観光、文化、都市戦略を横断し、「バーチャル渋谷」や「もしもプロジェクト」など、多様な主体による共創事業を推進してきた。

街を実験場に、挑戦者と未来を育てる。

「やりたい」と相談するより、「もうやっています」と言える方がいい。金山淳吾さんが大切にしてきたのは、必要だと思ったことを自ら始め、周囲を巻き込みながら形にしていく姿勢です。渋谷区観光協会の代表理事として、行政、企業、商店街、クリエイターなど多様な人々をつなぎ、「バーチャル渋谷」や「もしもプロジェクト」などを実現してきました。その原動力にあるのは、渋谷を完成された街ではなく、新しい挑戦が生まれ続ける実験都市として捉える視点。プロジェクトを立ち上げるだけでなく、人と人の関係を育て、次の挑戦につなげることを重視しています。暮らしの場でもある渋谷への愛情を胸に、個人の想いと街の課題を結びつけながら、都市の可能性を広げ続けています。



区民・来街者参加型の防災イベント「もしもFES渋谷2025」



「SOCIAL INNOVATION WEEK2025」の様子



Toru Hashimoto

橋本徹

SUBURBIA主宰。1990年代以降の渋谷カルチャーを牽引し、「Free Soul」シリーズをはじめ約400枚のコンピレーションCDを監修・選曲。カフェ運営やUSENの音楽プログラムを通じ、都市の日常に音楽文化を広げてきた。

音楽や空間を編集し、街の記憶を未来へつなぐ。

1990年代、渋谷の街には音楽を探し、語り合い、新しい文化を生み出す人々が集まっていました。その中心で独自の音楽文化を発信してきたのが、SUBURBIAを主宰する橋本徹さんです。「Free Soul」シリーズをはじめ、約400枚のコンピレーションCDを監修・選曲。年代やジャンルにとらわれず、気分やシチュエーションから音楽を捉え直す編集力で、多くの人々の暮らしに新しい音楽との出会いを届けてきました。カフェ運営やUSEN放送を通じて、街の日常空間にも音楽の豊かさを広げています。橋本さんが紡いできたのは、楽曲だけでなく、人々が集い、語り合い、文化を育んできた都市の記憶。渋谷で生まれた音楽の精神を、次の時代へとつなぎ続けています。



橋本徹氏の歩みをたどる『渋谷カルチャー考現学』（原知章著）



Toshitaka Kitamura

北村俊生

一般社団法人シブタン理事。学校と企業、行政、地域をつなぎ、子どもたちの探究活動を支援。年間26校、約100社との連携を通じ、探究フェスやジュニアボードなど、子どもが主体となって挑戦できる学びの機会を創出している。

街全体を教室に、子どもの可能性をひらく。

子どもたちの学びは、学校の中だけで完結するものではない。北村俊生さんは、渋谷という街の多様な人や企業を教育につなぎ、子どもたちが社会と出会う機会をつくってきました。自ら資金を投じて立ち上げた「シブタン」では、年間26校、約100社との連携を実現。約3,000人規模の探究フェスやジュニアボードなど、子どもたち自身が考え、行動する仕組みを育んでいます。活動の中心にあるのは、常に子どもたちを主役にするという信念。自ら役員を退くことで次世代へ役割を渡すなど、その姿勢を行動でも示してきました。学校と街の境界を越え、多様な大人との出会いから新たな可能性が生まれる。北村さんは、渋谷の街全体を学びのフィールドへと変えています。



千駄谷小学校150周年、50年前のタイムカプセル開封の様子



Yuji Fujita

藤田祐司

Peatix Japan株式会社 代表取締役。イベントを通じて人とコミュニティをつなぐプラットフォームを構築。渋谷では「SHIBUYA BALCON」の主催や「シブラバ倶楽部」の運営などをし、ビジネス、カルチャー、地域活動を横断する出会いと挑戦を支えている。

人が集まる場所から、新しい挑戦が動き出す。

一つのイベントとの出会いが、人生を変えることもある。藤田祐司さんは、イベントプラットフォーム「ピーティックス」の共同創業者として、人々の「集まりたい」「何かを始めたい」という想いを支えてきました。年間約15万件のイベントが掲載される仕組みを育てる一方、渋谷では「SHIBUYA BALCON」の主催や「シブラバ倶楽部」の運営に自ら関わる。企業、行政、クリエイター、地域で活動する人々が立場を越えて出会う場をつくっています。東日本大震災やコロナ禍など、社会が大きく変化する局面でも、活動を続ける主催者に寄り添ってきました。人が集まることは、新しい関係や挑戦が生まれること。藤田さんは、オンラインとリアルの双方から、渋谷のコミュニティと可能性を広げ続けています。



「Peatixコミュニティアワード2026」の様子



Eriko Sekine

関根江里子

株式会社ゆあそび 代表取締役。金融業界での経営経験を経て、2022年に小杉湯へ参画。2024年、東急プラザ原宿「ハラカド」に小杉湯原宿を開業し、銭湯を通じた日本文化の継承と地域の居場所づくりに取り組む。

原宿の真ん中に、100年続く日常を。

流行が生まれ、絶えず変化する原宿。その真ん中に、100年続く日常をつくろうとしているのが関根江里子さんです。金融業界で経営に携わった後、銭湯が持つ社会的な価値に惹かれ、小杉湯へ。2024年、東急プラザ原宿「ハラカド」の地下に「小杉湯原宿」を開業しました。あえてサウナを設けず、湯に浸かるという銭湯本来の文化を大切に。開業前から地域の人々と関係を築き、観光客だけでなく、子どもから高齢者までが日常的に集う場所を育ててきました。毎朝自ら清掃に立つのも、経営と現場を切り離さないという信念から。目指すのは、一過性の話題ではなく、何度でも帰ってこられる街の銭湯。文化の価値を信じ、原宿から次の100年へとつないでいます。



小杉湯名物「ミルク風呂」と替わり湯



原宿・神宮前交差点に位置する「まちの銭湯」



Kodai Okumura

奥村紘大

「東京大学渋谷まちづくりゼミ」代表。学生の立場から商店会、行政、デベロッパーなどと連携し、年間8件のプロジェクトを推進。現場での実践と対話を重ね、100年続くまちづくりの学びと協働の基盤づくりに挑む。

100年先の渋谷へ、学生が街の当事者になる。

再開発が進む渋谷の未来を、ただ見つめるのではなく、自分たちの手でつくりたい。奥村紘大さんは、「東京大学渋谷まちづくりゼミ」の代表として、学生と地域を結ぶ新たな活動を展開しています。商店会や行政、デベロッパーとの連携に加え、自ら腕章を巻いて路上警備に立つなど、街の現場に入り込む姿勢を大切にしてきました。「妄想から構想へ、構想から実装へ」。年間8件のプロジェクトを通じ、延べ1,000人以上の関係者を巻き込みながら、学生だからこそできる挑戦を重ねています。目指すのは、関わる学生が入れ替わっても活動が続く、100年先まで受け継がれるゼミ。渋谷で出会った人々との信頼を積み重ねながら、若い世代が街の未来を担う新しい形を示しています。


渋谷阿波おどりの企画運営と「渋谷桜連」の立ち上げ・運営を担う


「東京大学渋谷まちづくりゼミ」講義の様子



Shun Suzuki

鈴木瞬

渋谷区立原宿外苑中学校生徒会長。生徒主体のイベント「原リンピック」の推進や、一日警察署長、交通安全パレードなどに取り組む。学校の枠を越えて地域や警察と連携し、仲間とともに新たな挑戦を生み出している。

「自分がやる」から、街の未来が動き出す。

「誰もやらないなら、自分がやる」。鈴木瞬さんは、そんな強い意志を胸に、学校と地域をつなぐ挑戦を重ねてきました。渋谷区立原宿外苑中学校の生徒会長として、生徒主体のイベント「原リンピック」を推進。一日警察署長や交通安全パレードなどにも参加し、学校の外へと活動の場を広げています。その原点には、かつての挫折と、周囲の人々に支えられてきた経験があります。自ら先頭に立つだけでなく、仲間を信頼し、役割を任せることも大切にしてきました。学校や地域の大人たちと協力しながら、年間約1,800人を巻き込む活動へと発展。受け取った経験やつながりを次の世代へ渡していく。鈴木さんの行動力は、若い世代が街の未来をつくる可能性を示しています。


原宿警察署の一日警察署長委嘱式の様子



原リンピックのフラッグを持つ鈴木氏

and and group

連鎖を生みだす起点。

and and は、渋谷のまちづくりに特化した事業グループです。
渋谷の課題も、魅力も、外から眺めるだけでは見えてきません。
and and グループは、渋谷に拠点を持ち、複数の事業を通じて
街の変化や人の動きに日々向き合っています。
現場で得た声やつながりを具体的な事業へとつなげ、
渋谷から新たな連鎖を生みだす起点になります。

Our Business

6つの事業領域



01 不動産事業

相続・権利整理から再開発・用地買収、サブリース、貸しスペース運営まで。渋谷に特化した不動産の専門集団。



02 教育事業

実践型・フィールドワーク型の学習プログラムで、学びを現場と社会につなぐ教育事業を展開。



03 メディアプロモーション事業

ローカルメディアの企画運営と屋外広告やスペース活用を連動。渋谷の街を舞台に、ブランドの認知拡大と共感を創出します。



04 インバウンド事業

観光案内・日本文化体験・宿泊・ポップカルチャー発信を通じた、訪日旅行者と渋谷をつなぐ多彩なサービスの展開。



05 地域共創事業

行政・企業・学生・地域住民が交わり、街に新しい価値を生み出すプロジェクトを推進。



06 ウェルネス事業

独自のストレッチとトレーニングを融合したメソッドを提供し、街にひらかれた健康拠点を運営。



Community Action

地域との取り組み



01 地域交流

地域の飲食店や企業と協働し、こども食堂やワークショップを通じて、子どもの学びと居場所を支え、世代を超えたつながりを創出。



02 地域イベント

日本各地の文化を国内外へ発信するとともに、訪日外国人との交流や、渋谷のにぎわい・多世代交流を生むイベントを企画・運営。



03 清掃活動

ごみを捨てないという意識と、街を大切にする気持ちを広げるため、渋谷センター街・公園通りで365日、清掃・啓発活動を実施。

太平洋商事株式会社 | and and group

設立	1993年（創業1974年）
事業内容	不動産事業（相続・権利整理、売買仲介、再開発・用地買収、不動産管理、店舗M&A、サブリース）
所在地	東京都渋谷区宇田川町14-13 宇田川町ビルディング3F
公式サイト	https://andand-shibuya.com/


and and